神々の移住地　豊の国

会員　昴　崇

牛石という巨石は、神の山「大村山」を向いている。この地に住みついた人々は死んだ人の魂を送る場所として冠状列石を構築し、魂送りの儀式「イ・オマンテ」を行っていたのであろう

二十歳の頃、奥飛騨の両面窟にて何らかの神秘感を味わって以来、二十歳代前半の楽しみは東日本の縄文時代の環状列石を見聞することだった。

それらの遺跡に立ってみて感じられることは、環状列石からは標高の高い山や秀でた形の山が見える場合が多いということである。

このような山は縄文時代の人々にとっては聖域であり、死んだ人の魂が宿る場所であったのだろう。

環状列石とは墓域でもあり、死者の魂を聖山や天上界へ送る儀式「イ・オマンテ」を執り行う場所でもあるのだと思う。

環状列石を見聞した後は、研究対象の比重を神社と御神体山の関係に移していったのだが、縄文人の世界観は神道の思想にも強い影響を与えているような気がしてならなかった。

二十歳代中頃の九州旅行では運命的な発見があった。

従来の「環状列石は東日本だけに分布している」という定説に反して、九州の大分県地方に環状列石がいくつか分布しているという噂を聞いた僕は、好奇心にかられて国東半島や別府湾沿岸地域を訪れたものである。

旅に持参した折りたたみ式のノコギリで太い雑草を刈っていくと、大湯環状列石よりも大規模な環状列石が現れたこともあり、神社の境内に巨石を組んだ環状列石が本殿のように鎮座していたこともあって、それらを目にしたときは定説に対する疑問を率直に感じ、古代巨石文化の奥深さを痛感したものだった。

そして大分県でも宇佐地方においては、柱状の石を立てて祭り場や墓域とする「立石遺構」が多く分布していることが判明し、大分県という限られた地方の中でも、巨石文化の地域性があることを認識した。

その中でも宇佐の米神山では、二本の立石を並べて立てた遺構を山中や麓で何組も見たため、古代人達から大きな研究課題を与えられたような気分になり、無性に楽しくなったことを憶えている。

その「二本一組構造」を持つ巨石文化を、やがて僕は岐阜県飛騨地方や東美濃地方の縄文遺跡から見出すことになるけれども、その時は遠くへ投げたブーメランが手元に戻ってきたような感覚がして、不思議な因縁を感じずにはいられなかった。

一節　「山の縄文共和国」と二つの巨石文化

さて縄文遺跡の見聞を続けてきて判明したことは、巨石文化には環状列石と立石という二つの流れがあることだった。

そのうち環状列石については、今から五千年以上も前の縄文前期と呼ばれる時代に、信州の諏訪や安曇野地方において、北極星を中心とする天体の運行を表現した遺構として発生したらしい。

続く縄文時代中期に入ると、環状列石文化は信州周辺地域にも伝わっていき、甲州（山梨県）都留の牛石遺跡、飛騨高山の垣内遺跡、下野（栃木県）塩谷の佐貫遺跡、伊豆半島の上白岩遺跡、磐城地方（福島県東部）船引の前田遺跡など、規模の大きい環状列石の分布から考えていくと、中部山岳地帯を中心とした「山の縄文共和国」とも呼ぶべき文化圏を想定してもよいと思う。

また同じく縄文時代中期、奥州日高見地方（岩手県北上市周辺地域）の樺山遺跡においては、柱状の石の周囲に放射状に石を配置した石組が発生した。

この石組は縄文後期に入ると、有名な大湯環状列石において「日時計形組石」となって、二重の同心円構造を持つ環状列石文化と合流し、やがて北海道小樽地方の忍路遺跡にまで二つの特質が伝わっていくようである。

これら奥州北部と北海道西部を中心とした地域は、同じ環状列石文化でも「日時計と同心円の環状列石」とも呼んでよさそうな固有の文化圏を形成しているので、中部山岳地帯を中心とする「山の縄文共和国」と区別して、「北の縄文共和国」とも呼んでみたい。

ところで、この二つの縄文共和国は弥生時代以降にどんな運命を辿っていったのだろうか。

この問題を「北の縄文共和国」について考えれば、その国の人々は後の世でエミシやアイヌと呼ばれるようになったのだろうし、アイヌ民族の文化や伝承などは縄文時代の記憶を見事に現代へと伝えていると思う。

だが、「山の縄文共和国」につ

いては実に不明な点が多い。
この国の人々は後の世において、「土蜘蛛」だとか「鬼」だとか、怪物として呼ばれるようになったことは想像に難くないけれど、果たして全ての人々がそんな末路を辿っていったのだろうか。
この疑問にたいして解明の糸口を与えてくれたものは、飛騨の国や豊の国の立石文化であった。

立石文化は縄文中期の飛騨古川で、生命誕生の瞬間を表現した石組として発生したらしく、続く縄文後期や晩期には東美濃や奥美濃地方にも伝わっていき、弥生時代以降は分水嶺飛騨一ノ宮の位山など、飛騨地方各地で受け継がれた形跡がある。
特に、聖山として名高い位山の「天の岩戸」の立石などは、立石文化と神話とが密接に繋がっていることを示しているのだろう。
立石の分布圏は、環状列石のそれと比べたなら遥かに狭い地域に限られてはいるものの、飛騨や美濃地方においては、石冠、独鈷石、御物石などと呼ばれる不思議な形の造形石器が盛んに作られており、縄文期日本列島において最も強い個性を持った地域のような印象も感じられる。
一方、豊の国の立石文化は発掘調査された遺跡が乏しいために、その年代を特定することが困難ながらも、それらは何故か豊かな神話伝承に彩られている。
「三女神が降臨した縁起が伝承されている、宇佐の三女神社」
「神武天皇を迎えた女神の伝説が残る、宇佐の米神山」
「海人族の歓迎を受けた山幸彦の伝説が残る、国東半島の猪群山」
「景行天皇と土蜘蛛族についての縁起を伝える、豊後山間部の俵積神社」
これらの伝承の時代背景は、おそらく弥生時代後半から古墳時代前半のことなのであろうし、これらの年代不明な立石遺構の謎を解明するためには、神社の縁起伝承や民間伝承を分析することが効果的だと思う。
加えて重要な点は、これらの立石文化を担っていた勢力が一つではなく、宇佐の豪族や部族、国東半島の海人族、土蜘蛛族など、複数で多様だということである。
これらの立石文化の源流は日本列島のどこかにあるのか、あるいは大陸のどこかにあるのか。それは一つなのか、二つ以上なのか。
僕は縄文バカであり、学者ではないので、豊の国の立石文化に加えて、この土地の環状列石文化までをも、縄文人や縄文人の子孫が担ったものだと考えてみたい。

では、そのように仮定したとして、豊の国の巨石文化は独自にこの土地で発生したものなのか、あるいは他の土地の人々が伝えてきたものなのかどうか。
僕は、この土地の巨大な環状列石や数々の立石遺構を目にしたとき、こんな事を確かに感じたことがある。
古代の豊の国には、何らかの理由で多くの人が集まって来たのではないかと。
それらの巨石遺構は、どうしても小規模の勢力が造ったものだとは感じられなかったのである。
大規模な人の移動は時代の変わり目に起こるらしい。
そして、縄文時代の遺跡は東日本に圧倒的に多く分布しているのに、弥生時代になると遺跡の分布が西日本に大きく片寄ってしまうという現象があるけれども、これは縄文から弥生に時代が移行する過程で、東から西へ人口比重の大きな変動が起こった事を示しているとしか考えられない。
この現象は、縄文人の大量死と大陸人の大量渡来という観点で考えることもできるのだが、一方で、縄文人の西日本への移住と大陸人の渡来という観点もあるはずだと思う。
そのため、もし豊の国へと他の土地からの移住があったとするならば、それは縄文時代の終わり頃の事だという推測を、ここでは提

起しておきたい。

また、この推測を補うかのような物証が発見された環状列石もある。

豊の国の内陸部、豊後犬飼の「神宿」という土地に存在する環状列石は、発掘調査こそされてないものの、「犬飼町史」によれば、ここからは縄文晩期の土器が表面採取されているというのである。

さらに、遺構の一部分が発掘調査された環状列石もある。

それは国東半島国見の「鬼籠」という土地の山上に存在する環状列石であり、「国見町史」によると、遺構の一部分からは弥生時代や古墳時代の土器が出土したという。

この結果は、「環状列石は縄文時代の遺構」だとする従来の説に反しているので、驚きを感じる人も多いだろう。

しかし、この地方の立石文化と神話伝承との密接な関係を参考にするならば、これは充分に有り得る結果だと思う。

豊の国においては、弥生時代になっても環状列石が造られ続け、古墳時代になっても祭祀が続けられていたのである。

次に、豊の国の環状列石がすべて発掘調査された場合、果たして信濃の環状列石よりも古い時期の遺物は出土するのであろうか。

その謎を解く鍵は環状列石の形にこそあるような気がする。

思うに、豊の国には楕円形の環状列石が多い。

だが本来の環状列石が、北極星を中心とした天体の運行を表現した遺構だとするならば、もともと円環の形は正円形だったはずである。

これに反して、楕円形、卵形、隅丸方形など、正円形ではない環状列石が造られるようになった理由は、環状列石文化を継承した人々が、その本来の意味を時代と共に忘れていってしまったからなのであろう。

正円形ではない環状列石は、縄文前期の信濃から時間と空間が離れた段階で出現してくるものなのである。

縄文晩期の豊の国は、縄文前期の信濃と長い年月と距離が離れている。

そのため豊の国では、円環の形の他にも、環状列石自体を山の上や尾根筋に造るなどして遺構の立地条件を変えたり、円環の内側に土を盛り上げた塚を設けたりして、この土地で環状列石の形態と築造場所を独自に変化させていったのではないだろうか。

このような現象は立石文化についても当てはまりそうな気がする。

つまり、縄文中期の飛騨古川から時間と空間が離れるほど、その本来の意味は忘れ去られ、立石文化を担った人々は幾つもの部族に分かれ、立石を直線状に並べたり、土の塚の上に立てたり、横倒しにして積み上げたり、立石自体を山の中腹や頂上に立てるなどして、それぞれの土地で立石遺構の形態と築造場所を独自に変化させていったのではないか。

日本列島の先住民である縄文の民は、長らく幸福な時代を送っていたらしい。

縄文時代を支配した思想とは、現代日本にも少し残っているように、「足ることを知る心」である。

足ることを知らない人々は、必ず大地の恵みを独占しようとするのである。

当時は小国家のような地域集団はあっても、その国境を巡る利権で争うことはなかったのであろう。

野の獣や、海や川の魚、空を飛ぶ鳥などは、全てカムイの恵みであり、皆で分かち合うものであり、「イ・オマンテ」によって天上界へお返しするものだったのである。

縄文時代においては、人や獣、草木などという境界線は存在せず、共生と調和こそが宇宙の真理であった。

遠い昔に、現代人よりも遥かに早く、調和と共生の哲学を確立していた賢明なる縄文の民。

ここで偉大なる祖先に敬意を表し、縄文の民に神々の称号を送りたい。

だが、長い調和の時代にも大きな変化が訪れた。

二節　支石墓民族の渡来

紀元前八世紀頃、中国大陸では王朝が滅んで混乱の時代が始まり、難民が生まれて各地に離散したらしい。

その頃の朝鮮半島では、机や碁盤のような形の墓が多く造られていて、現在それらは支石墓と呼ばれている。

支石墓には北方式と南方式の二種類の形がある。

北方式支石墓は、朝鮮半島北西部の黄海道や平安南道を中心に半島の北半分に多く分布しており（半東北東部の咸鏡北道には存在していないという）、古朝鮮などとも呼ばれる現在の中国東北部の遼寧省にも存在しているようだ。

北方式は、四枚の板状石を立てて長方形の石室を作り、その上に大きな板状の上石を乗せる構造を持つことから、卓子式支石墓という呼び名もある。

支石墓がドルメン（石の机）と呼ばれる理由も、北方式の形が机を連想させるからである。

一方、南方式支石墓は朝鮮半島南西部の全羅南道を中心にして、半島南半分に多く分布している。

南方式は、埋葬施設が地下に存在して上石だけが地上に出ていることが大きな特質であり、構造が多様で分類が困難ながらも、大きく分けると、上石の下に支石がある碁盤式（有支石南方式）と、支石が無い蓋石式（無支石南方式）の、二つの形があるという。

碁盤式は、幾つかの石塊を支石として上石を支える形態であり、確かに碁盤の様にも見える。

蓋石式は、支石まで無くなってしまった形態であるが、一応こんな形でも支石墓と呼ばれている。

南方式支石墓においては、上石の下の構造が変化に富んでいて、板石で構成された石棺がある形態や、割石を水平に積んだ石槨がある形態や、石室を中心に石を積み重ねてある形態など、何種類もの形があるという。

ちなみに、朝鮮半島の支石墓に北方式と南方式があることを初めて発見した人は、世界的な人類学者として知られる鳥居龍蔵博士である。

鳥居博士が大陸や日本列島を歩いて調査見聞をした時代は大戦前である。

そして博士は、朝鮮の支石墓が日本にも伝わったことを想定して、九州各地などを歩いて啓蒙活動を続けた。

その後、北九州各地からは南方式支石墓に似た墳墓が続々と見つかり、発掘調査も行われ、ようやく博士の推測は証明されたようである。

いわば鳥居博士は、日本列島における巨石文化研究の元祖である。

ただ鳥居博士の時代は、発掘調査による資料がとても乏しかったので、博士の推測には誤りもある。

それは、北方式と南方式では、どちらの支石墓が古い年代に造られたのかという問題である。

この問題については、これまで色々な議論がなされたようで、これを鳥居博士は、南方式がより古い年代に造られたと推測したのであった。

ところが最近の韓国考古学会では、シベリアあるいは中国東北部から伝来した石棺墓や積石塚が、朝鮮半島の北西部で独自に変化して支石墓が発生したという見解が広く受け入れられているという。

つまり、石棺墓の石室までもが地上に現れた形に変化すると、北

方式支石墓になってしまうという訳である。

そして北方式から南方式への変化については、環状列石と立石の話で使った理論を再び応用して、以下のような説を展開してみたい。

それはまず、北方式分布域のどこかに、最も古い年代に造られた支石墓があって、それが支石墓の原点になったということである。

次に、その原点の遺跡から時間と空間が離れていくほど、支石墓は元の形から離れて、石室が埋没した南方式へと変化し、さらには上石の下の状態が様々な形へと分化し、支石までをも無くしたり、川原石や割石で石槨を造るようにもなった、ということである。

それ以後、南方式支石墓は北九州へと伝わり、そこでも独自の変化を遂げることになる。

さて、日本の弥生時代の開始年代については引き続き議論がなされているが、ここでは紀元前六世紀頃が始まりだと仮定し、以後三百年ほどの期間を縄文から弥生への転換期だと考えて話を進めていきたい。

その頃、朝鮮半島からの渡来人達は、まず玄海灘沿岸地域へと移り住んで、肥沃な土地で水田稲作を始めて定住した。

これらの人々の主な墓制は支石墓だったのだろうし、唐津平野に分布するそれらは、数の上でこそ際立ってはいなくとも、渡来人達が最初に造った支石墓だったのではないか。

それから少しだけ時代が下ると、佐賀平野では大小いくつもの集落が形成されて、数多くの支石墓が造られることになる。

その中でも、百十八基の支石墓が見つかった丸山遺跡や、四十三基が見つかった礫石（つぶていし）遺跡は、支石墓伝来期の代表的な拠点集落である。

これらの遺跡では、朝鮮半島の支石墓とは構造が変化しているようであり、上石の下の埋葬施設が大きく三つの構造に分けられ、弥生時代初期北九州における、人々の死生観や社会の実相が伝わってくる。

まず一つ目の形態は、埋葬施設が石棺になっている支石墓である。

これは佐賀平野でも唐津平野においても、それぞれ一つしか見つかっていないので、どうしても地域の首長墓だという印象を受けてしまう。

今後これらの地域で複数の石棺支石墓が見つかったとしても、それが地域の有力者の墓だということに変わりはないと思う。

次いで二つ目は、壺棺の支石墓なのだが、どうやら壺棺に葬られた人は、早くして死んだ子供や乳幼児であるようだ。

しかも埋葬の方法は、壺棺を斜めに傾けて埋め、その胴部に穴を開けているというのだから、これは縄文人の死生観に極めて似ているといえそうだ。

その三つ目は、土壙の支石墓である。

これは地面に穴を掘って底に石を敷いたりした埋葬施設で、多くは成人の墓であるようだ。

この形態は数の上で、佐賀平野や唐津平野の支石墓の大部分を占めているから、庶民の墓だということになるのであろうか。

また、これら佐賀平野に定住した人々は、数百年後には小国家のように強力な勢力になった可能性もあるだろう。

その勢力の残した足跡が、かの有名な吉野ケ里遺跡なのではないか。

なお、島原半島有馬の原山遺跡は、支石墓伝来期の大規模拠点集落であり、遺跡の破壊が進むまでは二百基近い支石墓が存在したという。

終戦後、北九州の支石墓遺跡は発掘調査が相次いで、縄文時代末期から弥生時代にかけての貴重な資料が集められた。

これらの調査結果の中で特筆すべきことは、伝来期の支石墓遺跡から、縄文終末期の夜臼（ゆうす）

式土器と、弥生初期の板付（いたづけ）式土器が出土することである。

この結果が示す事は、支石墓を伝えた人々が弥生時代を到来させたという事なのだろう。

この夜臼式土器と板付式土器は、籾の圧痕が付いた状態で出土することがあり、水田稲作の伝わりとは特に関係が深い土器だと考えられている。

これら二種類の土器が出土した遺跡として、博多の板付遺跡は特に名高い場所である。

板付遺跡では、夜臼式土器だけが出土する縄文末期の地層から、畦や取水排水溝などの水田遺構が見つかり、定説を覆す発見などと言われて、学者研究者を騒がせたこともある。

縄文時代の終わりには、すでに水田稲作が行われていたのである。

この調査結果から判断する限り、縄文人と渡来人が争っていたとは考え難く、

むしろ、縄文人は渡来人と調和する道を選び、水田稲作を自ら受け入れたと考えた方が納得できる。

この他にも、縄文末期の水田遺構が見つかった場所には、糸島平野の曲がり田遺跡や、唐津平野の菜畑遺跡があり、初めて水田稲作の伝わった場所が、唐津から博多にかけての地域だということを実感させてくれる。

これらの分布地域は、支石墓が初めて伝わった地域と重なっているように感じられるし、土器形式の共通性も合わせて考えると、水田稲作と支石墓は、一緒に北九州へと伝わったような気がしてならない。

ところで、最近の考古学の調査によると、弥生初期の支石墓から出土した人骨を鑑定した結果、それらには縄文人によく似た形質が見られたという。

しかも、それらの人骨には、縄文時代の風習であるはずの、抜歯までもが施されていたという。

支石墓は明らかに朝鮮半島から伝わった様式の墓であるので、この鑑定結果には少しばかり驚きが感じられる。

しかし、死んだ子供や乳幼児を壷棺に葬る風習や、縄文末期の夜臼式土器が出土することを考えると、意外にも北九州の支石墓は、縄文人との関係が深いことが判るのである。

縄文人と渡来人は、速やかに相互理解して融和し、同じ場所で共生して混血していったのではないか。

かくして縄文時代末期、朝鮮半島から数多くの人々が移住してくる事態に対して、日本列島本州の縄文人達は大きな判断を迫られた。

そして本州の縄文人達は、ある程度の部族を北九州へと上陸させる決断を下し、その人々は小倉の辺りで二つの勢力に分かれた。

小倉から西へ向かった勢力は、渡来人と共生する道を選び、水田稲作や支石墓文化までをも受け入れて、時代と共に一体化していった。

一方、小倉から南へ向かった勢力は、渡来人とは住み分ける道を選んだ。

この勢力の残した遺産こそが、豊の国の環状列石や立石遺構である。

参考文献

「韓国の古代文化」韓炳三　日本放送出版協会　一九九五年
「アジアの巨石文化　ドルメン・支石墓考」八幡一郎・田村晃一編　六興出版　一九九〇年
「日本人の起源　古人骨からルーツを探る」中橋考博　講談社　二〇〇五年
「鳥居龍蔵伝　アジアを走破した人類学者」中薗英助　岩波書店　一九九五年
「人類学上より見たる我が上代の文化」鳥居龍蔵　叢文閣　大正十四年

三節　豊後速見　下山環状列石

今から六千五百年くらい前、九州の南の海で想像を絶する大噴火が起きた。

その海底火山から噴出した火山灰は、南九州の全域を覆い尽くし、そこに存在していた多くの村を壊滅させただけでなく、北九州や四国などの地域にも大きな被害を及ぼし、西日本の大部分を人の住みにくい土地に変えてしまったらしい。

そのため、山陽や山陰、関西地方など、西日本に住んでいた縄文人達は、住みやすい土地を求めて東へと移住し、まずは信州を中心とした地域に定住して、新たな理想郷を形成していった。

日本列島最初の巨石文化は、その大噴火から約千五百年間の時代「縄文前期」に、信州の諏訪や安曇野地方で発生したようだ。

その大噴火が起きた場所は、現在になって「鬼界カルデラ」と呼ばれるようになった。

日本の考古学では、縄文遺跡の分布が東日本に片寄っているという謎があるけれども、その謎には「鬼界カルデラ」の大噴火が大きく関係しているようである。

「鬼界カルデラ」の大噴火が起きる前の時代、南九州には縄文人達の最古の理想郷があった。

そんな南九州の中でも、鹿児島湾に面した地域では、近年になって発掘調査が進み、縄文時代早期の「上野原遺跡」や「加栗山遺跡」、さらに古い縄文時代草創期の「掃除山遺跡」など、当時の面影を伝える集落跡が次々と姿を現した。

特に、鹿児島湾北部の「上野原遺跡」では、竪穴住居跡五十二棟が発見され、その縄文理想郷の中心地のような印象も受ける。

それまでは、縄文時代といえば東日本という印象が強かったのだが、東日本の縄文文化の繁栄は、「鬼界カルデラ」の大噴火以後の時代の事なので、これによって縄文文化の源流は、さらに遡って、南九州に求められるようなのである。

ただ問題は、日本列島巨石文化が南九州で発生したのかどうか、ということである。

これについては、未来の発掘調査で新しい発見が出る可能性がありながらも、今のところ、南九州の縄文早期の遺跡から環状列石や立石遺構が出土したという報告は聞こえてこないので、この原稿では、縄文時代前期の信州で巨石文化が発生したと仮定して、今後も話を進めていきたい。

さて、日本列島の古代巨石文化が研究され始めてから、およそ八十年の歳月が流れた。

その始まりは大戦の前、鳥居龍蔵博士によって、日向延岡や別府湾沿岸地域、伊予大洲、尾張地方などの巨石遺構が、啓蒙的に実地見聞を受け、大戦後には、東日本の環状列石などが発掘調査され、後には幾多のアマチュア研究者が多様な見解を発表し、ようやく近年になって、どの場所に如何なる巨石遺構が分布しているのかが明らかになってきたようである。

それでも、巨石文化研究には幾つもの大きな謎が残されていて、大分県地方の巨石文化の謎は、その代表だと言ってよいだろう。

古代の「豊の国」、現在は大分県と呼ばれている地方の巨石文化には、大きく分けて四つの謎がある。

「何故、この地方に多数の巨石遺構が分布しているのか」

「環状列石と立石遺構、二つの巨石文化が存在する理由は何であるのか」

「どんな人々によって継承されたのか」

「それらの巨石遺構は、いつの時代に築かれたのか」

残念ながら、これら大分県地方の巨石遺構は、その多くが発掘調査の対象になっていないので、土器や石器などの物的証拠に乏しく、これらの謎を解くことは困難である。

とはいえ、僕も巨石文化研究を十数年は続けてきたので、ここは一つ仮定法という秘策を持ち出し、これらの謎に挑戦していきたいと思う。

大分県地方の巨石遺構は、それぞれが実に多様な形を持っており、それらの遺構を年代の順に並べることは難しい作業である。

しかしながら、朝鮮半島や北九州の支石墓文化のように、時代の流れによって構造が変化して、多様な形態が生まれる事を参考にすれば、これは決して解けない問題だとは思わない。

この謎を解くためには、まず大分県地方の巨石遺構には、どこかに源流が存在すると考え、とりあえず、その源流に何かを仮定してみることではないか。

その源流については、日本列島本州の中部山岳地帯における、縄文時代の巨石文化を当てはめてみたい。

また、大分県地方の巨石遺構には、環状列石と立石遺構の二種類が存在するので、その源流についても二つ存在する筈だと仮定してみる。

すなわち、環状列石文化の源流は縄文時代前期の信州であり、立石文化の源流は縄文中期の飛騨地方である。

次なる過程は、信州や飛騨地方の巨石遺構と大分県地方の巨石遺構を比較し、構造の違いを分析することである。

つまり、信州や飛騨地方の、日本列島巨石文化の原点とも言うべき遺跡に構造が似ているほど、古い年代に造られた巨石遺構だという訳である。

個人的な見解では、大分県地方において最初に造られた巨石遺構は、環状列石については速見地方内陸部にあり、立石遺構については宇佐地方の安心院（あじむ）盆地にあるのではないかと考えている。

豊前小倉。

本州から渡って来る人々にとって、この土地は九州の玄関口である。

縄文時代の終わり頃、本州から北九州へと上陸した縄文人の部族達は、そこで二つの勢力に分かれ、それぞれ西と南に移動していった。

玄海灘沿岸地域は朝鮮半島から渡ってきた人々が多く居住しており、小倉から西へと進んだ勢力は、その渡来人達と共生する決断を下し、自らの縄文文化を少し残して、渡来人の伝えてきた水田稲作や支石墓文化までも受け入れ、時代の流れと共に混血していった。

それに対し、小倉から南へと進んだ勢力は、渡来人とは住み分ける決断を下し、瀬戸内海沿岸地域を南下して豊前の宇佐平野に辿り着いた。

当時、渡来人の勢力は宇佐平野までは及んでおらず、それ以後、縄文人の勢力は宇佐から南の地域で繁栄し、結果として、それらの地域に縄文文化の流れを汲む巨石遺構を残すことになった。

ただ、本州の縄文巨石文化には二つの形があるので、したがって、これら縄文人の勢力にも、環状列石文化を継承する部族と、立石文化を継承する部族があった。

宇佐平野からの進路には、大きく分けて三つの道がある。

その一つ目は、まず宇佐平野から東へ進み、国東半島を海沿いに廻って行く道である。

この国東半島の巨石文化は、環状列石も立石遺構も規模が大きくて、それにまつわる神話伝承にも何らかの意味が隠されているようである。

その二つ目は、宇佐平野から宇

佐川（現在の駅館川）などを南へと辿って、安心院盆地へと至る道である。

安心院盆地には立石遺構が多く分布し、この土地に残された神話伝承は様々な年代の記憶を伝えているため、立石文化を継承した部族が長く拠点を築いた事は確かであろう。

その三つ目は、これら二つの道の間を南下して別府湾沿岸へと至る道である。

この道を南下し、別府湾が見える前に横道を西へと入って行くと、そこには巨大な環状列石が存在する場所がある。

そこは環状列石文化を継承した部族の大きな拠点であった。

その環状列石は、本州の環状列石に近い要素を幾つも持っており、豊の国の巨石文化第一号とも言うべき、記念碑的な縄文文化の遺産である。

そして、この節においては、その三つ目の進路を辿った部族の足跡を追ってみたい。

一九九六年十月、僕は初めて大分県の速見郡山香町を訪れた。

その理由は、この土地に巨大な環状列石遺構が存在するという噂を聞きつけたからである。

僕はフェリーで別府に上陸するなり、すぐさま山香町役場を訪れ、町の教育委員会から、その環状列石の位置を聞き出そうとした。

町役場は当時、丘の上に真新しい鉄筋の建物が出来上がっていたのだが、役場の人によると、教育委員会だけは別の場所にあると言うので、メモに従って指示された場所に辿りつくと、そこには古い鉄筋の小さな建物があった。

その中に入って行くと、迎えてくれた人は、建物には似つかわしくない洒落たメガネをかけた紳士であった。

ここに来た理由を話すと、この紳士は僕を珍獣でも見るような目で眺めながら笑ったものだった。

冷静に考えれば、これは当然の感情であろう。

それでも紳士は、環状列石など、山香町域の巨石遺構について、僕に色々と教えてくれた。

まず、一番目当てにしていた巨大な環状列石については、何か市町村史の類でも開いて、白黒で不鮮明な写真を見せてくれた。

その写真を見ると、その環状列石は大規模であるために、草を刈って遺構の全体を検出することが困難であるらしく、弓なりに連なった幾つもの石が、草むらの遠くにまで続いている様にしか見えないので、不思議な感覚と未知なる対象への期待感が、自分の心に同時に沸き起こったことを憶えている。

そして、この環状列石の形と大きさについては、アルファベットのUの形をしていて、全長は七十メートルくらいだという。

これを聞いたとき、何か奇妙な印象を受けて困惑したものの、紳士によれば、この環状列石の土地の所有者は二人いて、そのうちの一人が自らの土地に並んでいた列石を取り除いてしまったため、結果として、現在のU字の形をした列石遺構になってしまったというのである。

遺跡の破壊は、いつの時代にも行われることではあるけれども、現代のような情報の行き渡った社会においては、それを防ぐ方法はあったに違いない。

ただ、それらの石が取り除かれる前の列石の形は、楕円形であったという。

つまり、この写真に写っている緩やかな弧を描いた列石は、巨大な楕円形の環状列石の片側半分なのである。

それでも、この列石遺構は残っている部分だけでも全長七十メートルくらいの規模があるというのだから驚いた。

これは、有名な「大湯環状列石」よりも大きい規模である。

秋田県北部内陸の「大湯遺跡」では、正円形の環状列石が二つ、それぞれ、直径四十二メートルと、

直径四十八メートル規模の遺構が存在しているものの、環状列石一つあたりの大きさならば、このU字形の列石の方が遥かに大きいことになってしまうのである。

しかも、このU字形の列石を、元の楕円形の環状列石に復元したならば、一体どれほどの大きさになるのであろうか。

また紳士は、この土地の、もう一人の地主について興味深い話をした。

その地主、井上香都羅（いのうえ・かつら）さんは、日本国内の古代遺跡を見て周る事が趣味だといい、車で各地を旅しているらしいのだが、趣味が高じて、というより、この環状列石を破壊から守り、後の世に保存するために、この土地を買ってしまったというのである。

この話を聞いた時は、何と気骨がある人かと感心したものだった。

僕とは親子ほど歳が離れているという井上さんに、ぜひとも会ってみたいものだと思った。

さっそく紳士から、井上さんの連絡先と環状列石がある場所を教えてもらい、現地へ行こうとすると、紳士がこんな話を始めたので少し気になった。

「井上さんは昔、海上保安庁に勤めていた時に事故に遭い、両足を失っておられます～」

その巨大な環状列石に向かう前、紳士から教えてもらった山香町域の巨石遺構に一ヵ所立ち寄った。

それは国道沿いの「立石」という土地の巨石で、ここには文字どおり立石遺構が存在しているのである。

その巨石は国道の車窓からも見ることが出来たので、すぐに場所が判った。

でも、それは巨石というほどの大きさはなく、田んぼの中の小さな石垣の上に、高さも幅も一メートルに満たない板状の石が立てられているだけであった。

その石は、収穫前の黄金色をした稲穂の中で、何とも素朴な雰囲気を漂わせていた。

「立石」という地名は、この石があるために名付けられたらしい。

この石の近くには、「立石」という名前の鉄道の駅があった。

こんな名前を持った鉄道の駅は、大分県に相応しくて素晴らしい。

別府に住んでいるという井上さんに連絡を取るべく、電話をかけてみると、どうやら留守というよりは、どこかに遠出をしているような気がした。

とにかく、翌日も、その次の日も、家に居る様子がないのである。

そこで思い出したことは、井上さんがライフワークにしている遺跡巡りのことだった。

実は、この大分県に来る数日前、僕が三河の自宅を出発した頃の事、出雲地方の山中で銅鐸が一ヵ所から多量に出土し、そのニュースが新聞やテレビで繰り返し報道されていたのである。

その遺跡が、現在では有名な「加茂岩倉遺跡」である。

きっと井上さんは、その銅鐸の出土した場所に行っているのではないかと思い、つくづく行動の速い人だという印象を持った。

そして、この推測は本当に当たっていた。

結局、井上さんと会えた日は、それから二週間ほど後の事で、その研究旅行が終わりに近づいて、九州を離れようとする日の事だった。

大分県速見郡山香町、大字・山浦、字・下山（しもやま）。

これが、巨大な環状列石が存在する場所の地名である。

遺跡の名称は地名から名付けられるため、それは地元の人から「下山環状列石」と呼ばれている。

ただ、紳士からは、その環状列石は昔、「牛石」という名で呼ばれていたという話を聞かされていた。

山香の街並から西へ、県道を二・五キロメートルくらい進み、

「上貫井」というバス停の辺りで道路を右へ入って行く。

ここからは、環状列石まで二キロメートルくらいの林道が続き、右手には、大村山という名の、なだらかで優美な形の山が見えた。

途中でT字路を、指示された右とは反対に左へ入ってしまい、何軒かの民家が集まった集落に行きついた所で、環状列石までの道をたずねた。

この「重永」地区の人は、「環状列石の地主　井上さん」のことは知っていて、おおむね「遺跡保護のために土地を買った人」を受け入れているようだった。

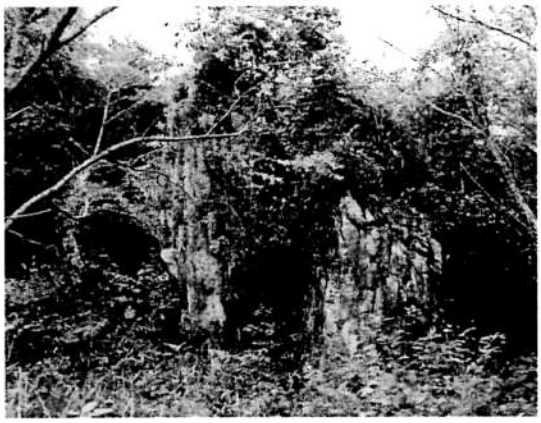
「牛石」とは、この「重永」地区の人が、その環状列石に付けた呼び名であるらしい。

道を教えてくれた婆様は、僕が「下山環状列石を見るために、はるばる愛知県から来ました」と言うと、珍獣を見るような目で僕を眺めて笑った。

まあ、これは、珍獣「エリマキトカゲ」が人里に迷い込んだような状況、だと言えよう。

現地へ辿りつくと、そこには意外にも、やや広い駐車場があって、奥には出土品の収蔵庫のような建物があった。

また、林道を挟んだ駐車場の向かいには、三つの大きな巨石が立っていて、両脇の巨石は、それぞれ高さ三メートルくらいあり、その中心に屹立している巨石は、高さ五メートルくらいあったように



駐車場脇の巨石

も記憶している。

これらの巨石は、巨大な環状列石と何らかの関係があるような気がした。

そして、駐車場の下には植林の林があり、その中の歩道を何十メートルか歩いて行くと、脇には数十個の石が並べられていた。

紳士によれば、これらは地主の一人が取り除いてしまった石であって、かつては楕円形の環状列石の一部分を構成していたのだという。

さらに植林の中を少し歩き、視界が開けると、そこには白く塗られた遺跡の標識があった。

「山香町指定文化財　ストーンサークル　山香町教育委員会」

ここから先の土地は地主が異なるというので、視界の先には雑木林の野原が広がっていた。

しかし、遺跡巡りが好きな人なら理解できるように、そこには環状列石など見えてはいない。

当然ながら、その列石は草の中に埋もれているので、それを見るためには草刈りをするしかないのである。

しかも、その列石を写真に写そうとするのならば、石に傷を付けないように、ていねいに草を取り除いて、列石を露出させなければならない。

だが、さすがにU字形の列石全体を露出させることは困難なので、この旅では、列石の片側半分を草刈りして写真に収めようと思った。

片側半分とはいえ、それだけでも長さは七十メートルくらいあるのだから、草刈りは楽ではない。

なお、雑草自体も何年も地面に生えていれば太くなって、鎌などでは切れなくなってしまうことを、それまでの経験で知っていたので、この旅には、あらかじめノコギリを用意していた。

一人での草刈りは、丸二日間を要した。

ただ残念ながら、このような遺跡で草刈り”という話を、巨石の研究が好きな人に話してみても、何故か理解を示さない人が多い。

どこの分野でも、現場主義を理解しない人は、群れを作って自己満足しているだけであって、大した業績を残すことはないのだろう。

考古学の分野において“現場主義を極めた人”と言えば、やはり鳥居龍蔵博士であろう。

日本における古代巨石文化研究の分野は、そんな人によって始められたのである。

この原稿を書いている西暦二〇〇五年現在、「下山環状列石」を撮影した写真は、自分自身が最も研究熱心であった頃の記憶を保存した最高の宝である。

草刈りを終えて、ようやく目の前に現れた環状列石の片側半分は、ゆるやかで川の流れのような長い弧が、夕日を受け茜色に輝いて感無量だった。

その弓状の円弧を構成する幾つもの石は、それぞれが程よい大きさを持っていて、形は、角張ったものや丸みを帯びたもの、先が三角形になって尖ったものなど、様々であった。

また、列石の手前から三分の一くらいの位置には、ひときわ大きく横に長い巨石が横たわっていた。

仮に、このU字形列石を元の楕円形の環状列石に復元したとするならば、この巨石が置かれた場所は、長く連なる円弧の要のような位置に当る筈であろう。

破壊を受ける前の「下山環状列石」は、絶妙な均衡が保たれた天秤の姿にも似て、それ自体が芸術品の様に調和の美を放っていたに違いない。

ところで、その要のような巨石を、しばし眺めていると、それが何かの動物の様にも見えてくるので珍妙な気分であった。

草刈によって現れたストーンサークル

それもそのはず、紳士からは、井上さんの作成による「下山環状列石」の見取り図を渡されていて、その図面によると、その巨石には「牛石」という名が付けられているのである。

その巨石は、長さが二メートル強、幅が一メートル強、高さは六十センチくらいの大きさで、三角柱の両隅を丸くしたような形をしているので、山脈の様でもあり、テントの屋根の様でもあるけれど、よくよく見れば、それは寝そべった牛の背中であった。

そして、巨石の長軸は、優美な形の大村山を向いているので、それはまるで、のんびりと牛が山を眺めている様にも見えてきて、何とも自分を楽しい気分にさせてくれたのであった。

牛石

この環状列石の近くに住んでいた人々は、そのような形から連想して、列石中央部の巨石を「牛石」と呼び、なおかつ、環状列石全体についても「牛石」と呼ぶようになったのであろう。

地図で見ると、その大村山の標高は四百十八メートルで、高くもなく低くもない山でありながら、その形は何故か人の心を落ち着か

せるような雰囲気があった。
きっと、この土地に住みついた人々は、死んだ人の魂を送る場所として大村山を選び、この山の麓に環状列石を構築して、魂送りの儀式「イ・オマンテ」を行なっていたのであろう。
また、その巨石は牛を象徴したものというよりは、カムイの使いとしての熊や猪、鹿など、大地に生きる獣全ての姿を象徴したものだと考えた方が良さそうだ。
この環状列石を造った人々にとっては、人や獣、鳥、魚、草木などという境界線は存在しておらず、全ては一つであったのだから、生きとし生けるもの全ての魂を送ることが「イ・オマンテ」であったのだろう。

■環状列石の六要素

では、ここからしばし、「下山環状列石」の構造を分析して、この遺構が造られた年代などを推測してみたい。
なお、それに先だって必要な作業といえば、環状列石の構造を幾つかの要素に分解することだと思う。
そして、それぞれの要素が“どれほど環状列石の原形から離れているか”を考えることで、謎の解明に少しでも近づける筈であろう。
ただ考古学は、数学とは異なり、“1+1＝2”になるとは限らない分野なので、これらの要素を分析して出した答えは、可能性を示したものでしかない。
現時点での個人的な見解では、環状列石の構造を六つの要素に分けて考えているので、以下の様に列挙してみる。

一　円環の形
二　石の総数、個々の石の大きさ
三　石の組み方、並べ方、石の形
四　築造場所
五　使用目的
六　それ以前の環状列石には無い、新しい構造

まずは、「**一番目の要素**」から分析してみよう。
環状列石とは、発生当初、北極星を中心とした星座の運行を地上に表現した遺構であったので、本来その円環の形は正円形であった。
「下山環状列石」の円環は、破壊を受ける前は楕円形だったというので、これは明らかに原形から離れた要素である。
楕円形の環状列石を他の土地で探していくと、北海道小樽の有名な「忍路（おしょろ）環状列石」は、南北三十三メートル、東西二十二メートルという規模なので、実は、楕円形の円環を持っているのである。
さらに、この「忍路環状列石」の中央部には、もう一つ小さい規模の円環が造られていて、その中心には柱状の石が立てられているけれど、このような同心円構造は、星座の運行を表現したものであろう。
大昔の人々は、夜空を飽きることなく毎日眺め続けた。
人々の目には、多くの星座が北極星を中心にして、正しく円を描いて回っている姿が、はっきりと見えていた筈である。
また、北極星の周りには、まるで穴でも空いているかのように、未知なる空間が見えていて、その穴の向こう側の世界を、あの世、あるいは、魂の故郷だと考えたのかもしれない。
同じ同心円構造でも、奥州北部には、円環の外側を二重にした環状列石が幾つか分布しているが、「忍路環状列石」の場合、その中央の立石構造とも併せて考えれば、それは“北極星付近に空いた穴を指し示した構造”だと認識してよいのではないか。
なお、これら同心円構造を持った環状列石は、縄文時代後期の遺跡から見つかることが多いようである。
一方、「下山環状列石」においては、楕円形の円環は一重で、そ

の中央部などにも立石構造は存在して無いようだ。

これは明らかに、北極星信仰を忘れた人々が造った遺構である。

加えて、楕円形の円環には、長径と短径の比率があるので、どれほど正円形から離れているかについても、測定することが可能だ。

これについて、縄文後期の「忍路環状列石」では、長径と短径の比率は、三対二であるのに対し、「下山環状列石」においては、（井上さん作成の見取り図を見る限り）その比率は、およそ二対一になるらしいのである。

「下山環状列石」は破壊を受けてしまったため、正確な数値を測定することは不可能であるものの、自分が実際に、「忍路」と「下山」を見て比べてみても、「下山」の方が長い楕円形を形成していることは間違いない。

「忍路」の“三対二”の楕円形は、地上では正円形のように見えたものだが、「下山」の円環は、地上から見ても明らかに楕円形なのであった。

円環の形は、北極星信仰との関係の深さを示している。

この観点から推測するならば、「下山環状列石」は、縄文後期よりも幾度かの年月が流れた時点で造られたと考えてよさそうだ。

次に、**「二番目の要素」**について。

縄文前期、信州諏訪の「阿久（あきゅう）遺跡」は、直径百二十メートルほどの巨大なドーナツ状配石遺構である。

この遺構では、人の拳くらいの大きさをした石が、合計で十万個ほども使われているといい、あまりにも石の総数が多過ぎるので、正確な数が把握できないようなのである。

石の総数は数え切れないほど多く、個々の石は小さい。

これが、環状列石が発生した当時の姿である。

続く縄文時代中期の信州周辺地域では、数十メートル規模の環状列石が造られるようになって、それを形作る石の総数は大幅に減り、個々の石は少し大きくなる傾向があるようだ。

さらに縄文後期に入ると、奥州北部では様式美の漂う豪華な環状列石が造られ、石の総数には大きな変化は感じられないものの、個々の石は一回り大きくなっているようである。

この傾向は海を渡って伝わり、北海道の小樽地方でも、やや重量を感じさせる石を使って円環を構築している。

二番目の要素については、おおむね時代の流れによって、個々の石は大きくなり、石の総数は、ある程度まで減っていく傾向があると思う。

「下山環状列石」では、要の巨石「牛石」をはじめとして、やや重量がありそうな石によって円環が構成され、石の総数は二百個以上はありそうだと感じた。

このような傾向から推測すれば、「下山環状列石」は、縄文後期以降の時代に造られたと言えそうだ。

なお、国東半島真玉の環状列石は、個々の石の幾つかに、かなりの重量がある巨石を使っていて、石の総数は数十個であった。

続いて**「三番目の要素」**、石の組み方、並べ方、石の形について。

「阿久遺跡」では、巨大なドーナツ状の円環の中央に、小さい板状の石が二列で並んでいて、その延長線上には、秀麗な円錐形の蓼科山がそびえていたという。

環状列石は、その発生当初から、高い山や秀でた形の山を意識した構造を持っていたのである。

前述したように、「下山環状列石」では、要の「牛石」が山を向くようにして配置されている。

また、「阿久遺跡」と同じく縄文前期、信州安曇野北部、大町の「上原（うわっぱら、或いは、わっぱら）遺跡」においては、柱状の石で構成した正円形の小さな環状列石が二つ見つかった。

そして、二つの環状列石には共

に、その円環中央部に一本の柱状の石が立っていたようである。

これは「忍路環状列石」でも見られるように、北極星を意識した構造であり、環状列石が発生した時代には、すでに存在していたものなのである。

ただ、「上原遺跡」の環状列石は、少数の柱状の石を立てて円環を形作っているので、“環状立石”という呼び方もあると思う。

このような環状立石は、飛騨高山の「垣内（かいとう）遺跡」でも見つかっているし、「忍路環状列石」の外側の円環は立石で構成されており、その近くの「地鎮山環状列石」では、小石を敷き詰めた空間を立石で囲んでいる。

これらは、特徴的な形の石を使った環状列石の代表例である。

一方、「下山環状列石」では、要の「牛石」や、井上さん本人から説明していただいたカエルのような形の巨石「ゴトビキ岩」など、動物のような形の石が配置されているから面白い。

このような石を使っている環状列石は、他に類例を探すことが難しい。

強いて取り上げれば、飛騨高山「垣内遺跡」の近くから見つかった「人面石」が、これらに近い要素を持っているのかもしれないが、おそらく「人面石」は、村の端に配置して魔除けとして使ったのではないか。

他にも、「下山環状列石」では、円環の内側に扇形の石が立っていたけれども、「垣内遺跡」でも扇形の石が二つ使われている。

さらに「下山環状列石」では、円環の内外に、出産の様子を表現したかのような石組みがある。

これは、一つの丸い石を二つの石で囲んでいるような石組みで、これに井上さんは「姫石」という名をつけた。

出産を表現した石組みとなると、縄文中期の飛騨古川「御番屋敷（ごばんやしき）遺跡」を思い出す。

だが、これについても他に類例を見出すことが難しい。

姫石

三番目の要素からは、「下山環状列石」の年代を推測することが困難だ。

「四番目の要素」、環状列石の築造場所について。

環状列石の築造場所は、その多くが山を意識した場所である。

基本的に、これには二つの立地条件があって、対象の山が標高の高い山である場合は、それがよく見渡せる場所に造られ、対象の山が標高の高くない秀でた形の山の場合、その麓に造られることが多い。

「阿久遺跡」と蓼科山、「上原遺跡」と立山、「千居（せんご）遺跡」と富士山、「垣内遺跡」と乗鞍岳、「釜石遺跡」と岩手山などは、標高の高い山と環状列石との関係を示す遺跡である。

これが縄文後期に入ると、奥州北部や北海道では、「大湯遺跡」と黒又山、「忍路遺跡」と三笠山など、秀でた形の低山の麓に環状列石が築かれている。

「下山環状列石」の立地条件は、こちらの部類に入る。

しかし、縄文前期の信州から時間と空間が遠く離れた時点においては、これらの立地条件にも変化が現れ、縄文後期以降の北海道では、低山の頂上や陵線上に、環状列石が造られる場合があるようだ。

「忍路遺跡」に近い「地鎮山環状列石」や、小樽の隣り、余市の「西崎山環状列石」、旭川に近い、深川の「音江環状列石」は、標高百メートルくらいの山の頂上などに環状列石を築いた遺跡の代表例である。

縄文後期では、山の中に墓を造るようになったり、山で祖先祭祀を行なう風習が現れて、「イ・オマンテ」の形にも少しずつ変化が現れるようだ。

なお、国東半島の環状列石は、山の頂上付近や陵線上に築かれているので、「下山環状列石」よりは、少し後の時代に造られたような印象を受ける。

四番目の要素から推測すれば、大分県地方の環状列石は、縄文後期以降の時代に造られたと考えてよさそうだ。

「五番目の要素」、環状列石の使用目的について。

環状列石遺構は、そのほとんど全てが、魂送りの儀式「イ・オマンテ」を行なうために造られた。

それは生きとし生けるものの墓でもあり、その魂を天上界や山へと送るための施設であった。

この要素だけは、いつ如何なる場所の環状列石でも同じである。

また、縄文後期から晩期にかけての武蔵の国（現在の東京都、埼玉県）では、珍しい様式の魂送りが行なわれていたようだ。

東京町田の「田端遺跡」や、同じく調布の「下布田遺跡」では、円環が二つに割れているかのような環状列石が見つかっているけれども、このような形の環状列石は、東京地方の縄文遺跡にだけ分布しているらしい。

おそらく、このような二つに割れた形の環状列石は、死んだら再び母体に宿って、この世に生まれ変わりたいという、輪廻の願望を込めて造られたのではないか。

これも「イ・オマンテ」の一つの形であろう。

「六番目の要素」、新しい構造について。

これは他の五つの要素と比べて、年代を決定する重要度が高いと思う。

例えば、北海道の縄文遺跡には“周提墓”という、環状の土の堤を巡らせた遺構が見られることがある。

この周提墓と環状列石は、しばしば同じ遺跡に共存していることがある。

昔、研究旅行で訪れた深川の「音江遺跡」では、環状列石群の奥の方に、小規模の環状土堤の内側に小さい石を集めた遺構を見たような記憶があるけれど、その時は、環状列石の形も時代と共に変化していくことを実感したものだった。

そして後々、知床地方斜里町の「朱円（しゅえん）環状列石、朱円周提墓」という遺跡を、図鑑の写真などで見た時は、「音江遺跡」のことを思い出した。

「朱円周提墓」は、やや大きな堤の内側に、幾つかの集石遺構が配置された遺構だったのである。

北海道では縄文後期に入ると、環状の盛り土と環状列石という、全く別の遺構が融合してしまうことがあるようなのだ。

これに近い現象は、大分県の環状列石でも起きている。

その環状列石は、大分市の南、大野郡犬飼町の神宿という土地にある。

それについて、「犬飼町史」には以下のような記述がある。

「神宿遺跡　～　これは『神が宿る』という意味を持ち、祭祀を行うところを示すものではないかといわれている。この神宿に高さ七メートル、長径五四メートルの小高い丘がある。この丘の中ほどからやや上部に、石がほぼ水平に並べられている。これらの石は、高さ一メートルぐらいのものから、二メートルにおよぶ大石もある。露出している石の数は二〇数箇に及んでいる。　～

別府大学賀川光夫教授は、この大石群は、環状列石であるという説を唱えられ、原始宗教遺跡と推定された（『大分県の考古学』）。いつごろの時代の遺跡かは明確でないが、この遺跡の近くから縄文式時代晩期の土器が発見されてい

るので、あるいはその時代の遺構ではないかと推定される。

〜

わが神宿では、近年、水田化のために遺物包含層が破壊されてしまった。このとき出土した土器は口縁部に刻目凸帯があり、縄文式時代晩期の土器と判定されている。（賀川光夫『大分県の考古学』）このことは、神宿の大石群が環状列石と証明する一証拠になるわけである。〜」

この「神宿環状列石」は、高さ七メートル、長径五十四メートルという小丘の、中腹より上に築かれているというのである。

このような、小さな丘の頂上部分を囲むような形の環状列石は、本州で探すことは難しい。

まさしく、これは“大分県の環状列石で独自に発生した構造”だと言うしかない。

これは、「下山環状列石」には無い構造を一つ付け加えた環状列石なのである。

そのほかの要素について、「神宿環状列石」の円環は楕円形で、長径は、「下山環状列石」の四分の一くらいであるようだ。

個々の石は、「下山環状列石」と同等か、それ以上の重量があるようで、石の総数は減少しているようである。

ただ、石の総数は、円環の規模が小さくなれば減っていく傾向があるので、「下山」と「神宿」の規模の違いを考えれば、この二つの間に大きな変化が起こっているわけではないと思う。

六番目の要素から推測すれば、「下山」の年代は、縄文時代晩期の間でも、「神宿」より少しばかり前の時代だということになるのではないか。

おそらく、「神宿環状列石」を造った人々は、「下山」に定住していた勢力から分かれていった部族なのであろう。

きっと、「下山」と「神宿」が造られる間の年月には、幾つかの縄文部族の心に、何らかの変化があった筈である。

また、「犬飼町史」を見ていると、この町域には、縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡が多いことに気づく。

「神宿」や、その北側の「下津尾」という土地では、縄文晩期に農耕が行なわれていたようであり、「町史」には、土器について以下のような記述もある。

「真萱遺跡　〜　真萱は、柴北川の北岸の台地に存在する部落である。『大分県の考古学』によれば、この真萱部落の近くで、縄文式時代晩期の土器が発見された。この土器には、その口縁部の一部分に籾のおしつけたあとがある。

〜

縄文式時代晩期の土器である夜臼式土器は、北九州を中心に広く分布している。犬飼町でも、真萱部落の『高縄遺跡』に発見されており、この地方にも分布していることがわかる。この種類の土器は、次の時代の弥生式時代の土器としばしば混在した状態で発見される。北九州では、この夜臼式土器に籾の圧こんが発見された例もある。

〜

この例よりほかに、犬飼町の神宿遺跡からも、長崎県山ノ寺遺跡出土の土器によく似た土器が発見されている。山ノ寺土器が、縄文式時代晩期の土器で籾の圧こんをもっていることから、犬飼町での縄文式時代遺跡の発掘は、これらの歴史上の疑問を解く鍵になるかもしれない。」

「神宿」に定住していた人々は、確かに農耕をしていたようであり、環状列石を築くほどの勢力を持っていたのだろう。

いつか「下山環状列石」が発掘調査された時に、そこから如何なる遺物が出てくるのか。

これらの記述を参考にすれば、ある程度の予測は出来そうだ。

そして年月が過ぎて、弥生時代、「下山」に残った勢力は、新たな形の環状列石を造り出したようで

ある。

以前、図書館で大分県の地名辞典（平凡社か、どこかの出版社）をめくっていた時のこと。

その厚い本の、速見郡山香町域のページで、以下のような内容の記述を見た記憶がある。

「山香町、大字・久木野尾、字・須久菩

須久菩塚

標高四百メートルの高原に、直径二十メートル、高さ五メートルの、円墳の様な塚がある。その頂上に自然石が積まれ、塚の中腹に環状に自然石が並んでいる。弥生土器片、黒曜石片が見つかった。」

その「須久菩塚」という遺構からは、弥生式土器が表面採取されているらしいから、これは「下山」よりも後の時代に造られたものだと推測できよう。

塚の中腹を囲むようにして円環を築いている構造については、「神宿環状列石」とよく似ており、明らかな関連性が感じられる。

さらに、塚の頂に石が積まれている点は、全く新しい構造である。

築造場所の変化も併せて考えれば、「下山環状列石」とは随分と様相の異なる環状列石だといえよう。

「下山」に残った勢力は、幾度かの時代が過ぎた後に、その近くで標高の高い高原を探し、環状列石の形にも新しい構造を取り入れて、新たな形の「イ・オマンテ」を行なうようになったのだろう。

なお、国東半島には、円環の内側に塚を設けた環状列石がある。

■両足義足の古代史研究者

一九九六年秋の研究旅行は、実に思い出深く、決して忘れることがない。

「下山環状列石」での草刈りと撮影を終えた後は、二週間くらい、方々の遺跡や神社を巡って、特異な研究分野の見聞を積んだ。

国東半島の環状列石では測量の真似事をして、宇佐の安心院盆地から湯布院盆地に向かう途中の夕暮れ時には、塚原という高原で神秘的な感覚に襲われ、大分県南部では巨石を見て廻り、日向高千穂では大勢の爺様婆様と一緒に神楽を見て楽しみ、天領豊後日田や福岡県の朝倉郡なども訪れてみた。

そうしているうちに、暦は十一月に入り、再び山香を訪れた時、「下山」の地主の井上香都羅さんと、ようやく面会することが出来たのであった。

「下山」の駐車場下から坂を登って現れた井上さんは、両足義足と二つの松葉杖という姿であった。

その当時の僕は二十五歳で、井上さんとは親子ほどの年齢差があった。

井上さんは僕の歳を聞くと、しみじみと若い頃の話を始めた。

かつて海上保安庁に勤務していた井上さんは、二十五歳の時に巡視艇の爆発事故に遭遇し、そのために両足を切断したのである。

しかし、井上さんは精神力が強く、何より根気が続く人であるので、障害者用の自動車を使って、日本中の古代遺跡などを旅しているようなのである。

井上さんの研究の独特な点は、遺跡を現場まで訪れて、その立地条件を詳しく見ていくことである。

特に、銅鐸、銅剣、銅鉾、銅戈など、青銅器の出土した場所は数百箇所も実地見聞しているらしく、まさにトップアマチュアだ。

十月中頃、出雲の山中で銅鐸が多量に発見された時、すぐさま井上さんが現場に急行した理由は、銅鐸の出土した場所と廻りの景観を確認するためだったのである。

井上さんが数々の遺跡を見聞して気付いたことは、古代遺跡と神山（信仰の山、神社の神体山など）との関係の深さであったという。

これら、青銅器の出土した場所、山と遺跡の関係、という二つの研

究対象については、井上さんは第一人者であるようだ。

これらの研究成果は、後年、「銅鐸祖霊祭器説」(一九九七年、彩流社)、「古代遺跡と神山紀行」(二〇〇三年、彩流社)という、二冊の著書となって世に発表された。

井上さんは、「下山環状列石」の構造について、現場で直接、僕に説明をして下さった。

要の「牛石」近くの円環内側には、扇を開いたような形の石が立っていた。

井上さんの考えでは、このような形の石は、「大湯環状列石」の『日時計形組石』のような役割があるのだと言う。

他には、楕円形の長軸先端近くの円環外側に、一つの丸い石を二つの石で囲んだ石組みがあった。

これは如何にも、子供を宿した妊婦を表現しているように見え、この石組みに対して井上さんは、「姫石」という名をつけて分類していた。

このような石組みは、円環の内側にもあるという。

「下山」の中で一番に面白いと感じた石は、カエルのような形の巨石だった。

その巨石は、楕円形の円環の中でも、要の「牛石」とは反対側の円弧の、ちょうど中央部に配置されていた。

そのカエルは円環の外側を向いているように見え、藪が無ければ、その先には秀麗な由布岳を眺めることが出来るという。

このような調和の保たれた配置は、何と優れた様式美であろうか。

楕円の二つの長い弧の、それぞれの中央に座って互いに背を向け、のんびり山を眺める二匹の獣。

何とも慎ましくて、心を和ませてくれる風景である。

その巨石に対して井上さんは、熊野の神倉山の、カエルのような形の巨石「ゴトビキ岩」に因んで、それと同じく「ゴトビキ岩」と名をつけて分類している。

その、要の「ゴトビキ岩」をよく見ていると、カエルの背中に相当する部分にゴツゴツとした隆起と窪みがあって、その紋様は蛇のようにも見えた。

大きな蛙の背中に這う蛇。

こんな珍妙なものが見られることも、研究旅行の醍醐味である。

それに反して残念だったことは、要の「ゴトビキ岩」の側の長い円弧が、「牛石」の側と比べると、列石を構成する石が少なくて、個々の石も小さく、円環の輪郭が薄くなっていることであった。

きっと、こちら側の列石も、石が幾つも取り除かれて、破壊を受けたのであろう。

なお、駐車場近くに立っていた三つの巨石は、地元では「夫婦岩」と呼ばれ、その間の植林が無ければ、「下山環状列石」から見ることが出来るという。

「下山」で説明を受けた後、井上さんと共に、山香町域の西福寺という土地に移動した。

教育委員会の紳士によれば、この土地の寺の裏山には、その頂に環状列石遺構があるというのである。

その場所には、“猪神”が祭ってあるとか、中世には城があったとか。

紳士からは、「猪が出ますので、登る場合は気をつけてください」と言われて注意も受けた。

確かに「下山」でも、猪らしき獣の走る足音を聞いたし、この辺りには猪が住んでいるのだろう。

西福禅寺は、「下山」の南方二キロメートルくらいの位置にあり、訪れてみると、一人の婆様が出迎えてくださった。

僕が用件を述べ、「教育委員会に行ったら、お洒落なメガネをかけた方が色々と教えて下さって〜」と言うと、婆様は、

「それは、ワシの息子じゃ」と軽く返して、お茶を振舞って下さった。

婆様は、寺の裏山について、「登ったら祟りがあると、昔から言われておる」と言ったように記憶し

ている。
これも、旅の楽しい思い出の一つである。

西福寺を後にした頃は、もう日が沈みかかっていた。
そんな夕暮れ時に、井上さんは、これまでに見たことも無いような、未知なる巨石文化遺跡に案内してくださった。
その巨石は、速見郡日出町南畑の高平（こうびら）という土地にあり、地図で確認すると、「下山」の南方十キロメートルくらいの位置だと判明した。
なお、「下山」から「高平」に向かう途中、県道と高速道路が交差する辺りのバス停の名が、地図上では「スクボ塚」と記してあった。
初めて目にした「高平」の巨石は、日没時刻の薄明かりで、ぼんやりと摩訶不思議な表情を見せながら、竹藪の中にたたずんでいた。
大小様々な板状の石は、その平らな面を、丸く盛りあがった小さな山の方に向けて、横一線に並び、祖先の鎮まる山そのものを祭っているように見えた。
地元の人々は、今でも一年に一度、その山に登って何らかの祭礼を行なっているという。
地図では、その山の標高について、四六四メートルと記してあったものの、何故か山の名が記してない。
奇妙な感じがしたので、その山の名を尋ねてみると、井上さんは自らの額を指差しながら〝ヒタイ〟と答えた。
神秘である。
これが、運命的な研究旅行の、最後の心象風景となった。
井上さんには、本日の案内に対して御礼を述べ、「高平」で別れの挨拶をし、別府の港でフェリーに乗って、九州を後にした。

一九九六年。季節は収穫の秋。
その三週間に及ぶ研究旅行は、黄金色の稲穂を刈るように、幾つもの収穫に満ち溢れて、大豊作となった。
今考えると、その旅が無ければ、自分の研究は大して進んでいなかったであろうし、それを豊作に導いてくださった井上香都羅さんには、今でも感謝の思いを忘れていない。
美しく色づく大地と人々の心。
後にも先にも、これ以上に豊かな経験を積んだ旅は無い。

■ 山香ストーンサークル記念館

二〇〇四年五月、「下山」の地に「山香ストーンサークル記念館」が完成した。
そして、井上さん自身も別府から山香に居を移し、「下山」に住みついてしまったようである。
この記念館のことは、縄文ジャーナル第四号（たちばな出版、二〇〇四年六月）でも世に知らされ、同じ号に僕自身の原稿も（井上さんが僕のことを国際縄文学協会に紹介して下さったため）、めでたく全国誌に初めて掲載された。
記念館オープンの記事では、サヌカイトや黒耀石、復元した縄文土器、中国やインドの青銅器、仏像などが展示してあるというけれども、井上さんからの便りでは、僕が送った自作の仏像まで展示してくださっているという。
「下山」を訪れてから八年近い歳月が流れていると思うと、大分県の環状列石の知名度が上がったことが喜ばしく、心に熱いものが込み上げてくる。

その後、井上さんからは、「下山」での新たな発見について便りが来た。
それによると、「下山」では、環状列石外の由布岳側の斜面に、もう一つ環状列石が見つかったというから、少し驚いた。

それは長径十数メートルほどの楕円形の環状列石で、その円環の中心部には大きな岩が配置してあるのだという。

その他には、姫島（国東半島沖）産の黒耀石や石器のような物、および石器を作ったときの破片や剥片も見つかり、石器を大分県の文化課に持って行き見てもらったところ、“一万年以上前の石器ではないか”という鑑定結果も得られたという。

環状列石の下に、旧石器時代の遺物が埋まっている可能性もあるらしい。

山香町域では、ドングリの貯蔵穴が大量に出た場所もあり、今後どこかに集落跡が見つかる可能性が高く、特に「下山環状列石」近くの平坦になった辺りの場所から、村の跡が出て来るような気がする、とのことである。

しかし、よく考えれば、井上さんの功績は大きいと思う。

これが、もし仮に、井上さんが「下山環状列石」を保護していなかったら、どうなっていたであろうか。

「下山環状列石」は完全に取り払われていたのかも知れず、そうなれば、これまでのように、

“環状列石は北海道と東北地方にあるものだ”などという説が、いつまでも罷り通っていた可能性もある。

これでは、“ゴリラは本当に実在するのか”という論争を続けることと同じで、学問としては次元が低い。

どこの世界でも、“教えられたことを憶えているだけで、自ら進歩していく意志が無い人”がいる。

思い込みとは恐ろしいもので、真実を追究しない人は、証拠を実際に見ても事実を認めないのである。

冷静な視点と優れた判断力を持っている人は少ない。

他人の功績や努力を公平に評価できる人も少ない。

井上さんのように、地道な努力を根気よく続ける人は目立たないから、ほとんど有名になることも無いのだが、人間は、知名度、地位、財産などに関係なく、公平な観点で評価されなければならない。

実直で誠実な井上さんに、小さな勲章の一つでさえも与えられない理由は何であろうか。

正直な者は、いつまでも人々の記憶に残って滅びることが無い。

縄文の遺産を守り、縄文学と縄文イズムを継承した功績は、未来にまで末永く語り伝えられるべきであろう。

■ 別府大学賀川教授 死の抗議

この節の最後に、一つ語っておきたいことがある。

以前、井上さんが親切にも、御自身の著書「古代遺跡と神山紀行」を僕に送ってくださったので、今でも度々読み返しているけれども、とても残念で気掛かりなことがある。

先に、「犬飼町史」を引用した折、その文中に、別府大学の賀川光夫教授という方が登場した。

実は、その賀川教授は、週刊誌で遺跡発掘結果ねつ造の疑惑をかけられて、二〇〇一年三月九日、自ら命を絶った。

井上さんの著書では、賀川教授が何度も登場し、教授の自宅や研究室での写真も載っているので、御二人は親しかったようである。

遺跡発掘ねつ造とは、一人の石器コレクターが、東北地方などの旧石器時代の遺跡において、発掘期間中に秘密裏に、自らのコレクションを地中に埋め、発掘作業中、これを自ら発見したように芝居を打ち、この事が新聞などで正しい発掘結果として報道され、後々、この発掘結果が教科書にまで載ってしまったという事件である。

「神の手」などと呼ばれた石器収集家の罪が発覚し、新聞やテレビで報道がなされたのは、二〇〇

〇年の十一月である。

そして翌年、某週刊誌の一月二十五日号で、「第二の神の手」などと見出しを付けられ、教授の死の前日まで、合計三回に及ぶ報道がなされた。

賀川教授は昭和三十七年、大分県南海部郡本匠村の聖嶽洞穴で発掘調査責任者を務めた。

聖嶽洞穴の調査では、黒耀石の旧石器と人骨が出土し、日本の洞穴遺跡で初めて、旧石器と人骨が共に出土した場所として知られている。

しかし一九九九年の再調査で、その地層を再発掘したところ、旧石器時代の遺物と縄文時代の遺物が同じ地層から出土したため、遺跡の評価が大きく揺らいでしまったようなのである。

賀川教授が捏造疑惑を着せられた理由は、これらの再調査結果などが大きく関係しているらしい。

これらの疑惑に対して、井上さんは「古代遺跡と神山紀行」の中で、以下のように語っている。

「賀川先生については　～　何度か大学の研究室や自宅を訪れ、その人柄に接し、人格・識見からも多くの学者の中でも数少ない尊敬できる人であった。聖岳洞穴調査の頃のことについても、毎日手弁当で別府から通われた話を聞かせてもらっていた。～

旧石器と縄文時代の石器、それに人骨が同じ層から出てきたことについても、慶應大学名誉教授江坂輝彌先生が言っているように、入り口あたりにあったものが洪水などで奥の低い所へ流れ込み、二次堆積していったのかもしれない。」

土の中の遺物は、長い年月の間に、自然災害や農作業などによって、下の物が上に出て来たり、上の物が下に埋もれたりして、乱されることがある。

また、捏造があったのかどうかを、人の人格から判断する方法もある。

“類は友を呼ぶ”という言葉は真実だ。

慎ましく無欲な人柄の井上さんと親しかった人であるのなら、捏造などという行為に及ぶ筈が無い。

九州や四国などの市町村では、教育委員会に賀川教授の教え子が勤務していることも多いというし、教授の人柄についても証明済みだと思う。

詐欺師、ペテン師、犯罪者は、罪を隠す必要があるために、話し合いを拒否する習性があり、人と挨拶することも少ない。

発掘結果の捏造をする心理を考えてみるならば、それを行なう人は、考古学の業績が乏しくて名誉欲だけは人一倍強いのではないか。

なお、個人的な観点では、考古学における捏造には、幾つかの種類があると思うので列挙してみる。

一　出土してない物を出土したことにしてしまう捏造

二　出土した物を廃棄して、出土してないことにしてしまう捏造

三　科学的な鑑定結果について、事実を隠して公表しない捏造

四　科学的な鑑定結果について、事実ではない数値を公表し、これまでの定説を覆して新説を作り出し、考古学上の業績を自ら演出して名誉欲を満たし、他人の業績には傷をつけ、自己陶酔の境地に浸りこむ捏造

賀川教授が疑惑をかけられた原因については、もう一つ思い当ることがある。

教授は大分県の考古学者であるので、この地方に多く分布する巨石遺構についても存在を認識しており、御自身の著書などでも、それらの存在に触れ、“大分県には環状列石が幾つか分布している”という発言をしてきたようである。

だが問題は、他の多くの考古学関係者が、大分県の環状列石の存在を認めないことである。

そのため、多くの考古学関係者の間には、“賀川教授はウソつき”だという評判が流れ、それが多く

の人の潜在意識に入り込み、聖嶽洞穴再調査をきっかけにして、教授の悪評が再び表面に噴出したのではないか。

そして、賀川教授に何らかの疑念を抱く人物が、悪い評判に火をつけて、週刊誌に働きかけをした可能性もあるのではないか。

賀川教授は、考古学会と学友、市民に対して、遺言を残しており、それが「週刊朝日」二〇〇一年三月三十日号に掲載された。

「学会学友　市民の皆様

～四十年前当時の調査者には不誠実者は一名も存在せず恥ずべき行為はありません。このたびの辱めをなくすることは当時の代表者である私の死により関係者の潔癖を証明し無謀な報道に抗議する以外にないと考えました。～

学会学友の皆様、御厚情をよせられた皆様、私の学問に対する誇りと責任を御賢察下されば幸せに存じます。

平成十三年二月二十五日　賀川光夫」

思い込みの恐ろしさ、真実を追究しないことの愚かさ。

長い年月が過ぎれば、愚かな意見は滅び、正しい者は勝利する。

（了）